星と月の奇跡

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星と月の奇跡

【Ｎコード】
Ｎ１８３５Ｅ

【作者名】
文樹妃

【あらすじ】
出逢った瞬間、運命を感じたの！いきなり告白して、玉砕。それでもあきらめない、天然少女の恋の猛アタックが始まる。冷たい彼は、果たして振り向いてくれるのか。（べたべた恋愛同好会、企画参加作品です）

（前書き）

べたべた恋愛同好会、第一回企画テーマ「出逢い」参加作品です。

出逢った瞬間、思ったんだ。
この人が、あたしの運命の人なんだって。
だから、あたしは言ったの。
きらきら光るプールサイドで、もっと光って見えた、彼に向かって。
あたしのときめきを、この胸の高鳴りを伝える言葉を。
「あの……好きです！　私と、付き合ってください！」

更衣室の、ロッカーの扉を開けながら、美夏ちゃんが笑った。
「いや～長い付き合いだけど、さすがに今日は驚いたわ」
黙って水着を脱いでいる私を横目に、美夏ちゃんは続ける。
「まあ、あれだけあっさり断られちゃ、あきらめも付くってもんでしょ！　それにしても、いきなり告白する星奈（せいな）のほうが、びっくりだけどね～。
今見たばっかで、さすがに『好きです』はないんじゃないの～？」
明るい声で、一人話す美夏ちゃんは、私の反応がないことを気にするように、少し黙る。
それでも黙々と、着替えを続ける私が、落ち込んでいるとでも思ったのか、うってかわって、優しく肩を叩いてきた。
「とにかく――元気出しなよ！　確かにかっこよかったし、溺れたところを助けてもらっちゃ、ポイントは高いけどさぁ。
あんな冷たい断り方する奴なんだから、性格はどうだかわかんないよ？　さっさと忘れて、またいい男探すのがいいって！」
ねっ、と覗き込まれた時、ちょうど私は着替え終わったところだった。オフホワイトのワンピースを整えて、私はまだ少し濡れたま

まの髪を、簡単にまとめる。
そして、顔を上げて、美夏ちゃんに笑った。
「ごめん、私、急いで行かなきゃいけないの。またメールするね！」
私の上機嫌の笑顔に、驚いた美夏ちゃんが呼び止めるのが聞こえる。それでも私には、急いでやりたいことが――いや、やらなきゃいけないことがあるんだ。
最後にもう一度だけ振り返って、手を振ると、私は急いでサンダルを履いて、更衣室を飛び出すのだった。
目指すは、彼の背中――今日知り合ったばっかりの、私の好きな人。
じりじりと焦げ付くような太陽が、まるで私を応援しているように見えた。

「またあんた？　これって、ちょっとしつこいんじゃないの？」
眉をひそめて、そう言い放った彼に、私は笑ってみせた。まだ荒い息を整えて、吹き出た汗を手の甲で拭う。
一緒に歩いてた友達らしき人も、私のことをじっと見てる。こっちの視線は、ちょっと面白がるようなものだけど。
気にせずに、私は彼を見上げた。大丈夫、追いつけただけでも、神様は私の味方だ。
「だって、あなたのこと、何も知らないくせにって言ったでしょ？」
そう言った私に、彼は眉間の皺を一層増やした。
「それが何か？　だって、事実だろ」
不機嫌にそう返されても、私は笑顔を崩さなかった。だって、嬉しいのだ。彼の声が聞けるだけで。
「うん、事実。だから、まずは知ることから始めなきゃ」
「知るって、何を――」
言いかけた彼に、私はお気に入りの、お花のついたかご型バッグ

から取り出した、生徒手帳を見せた。
「私、天野　星奈。百合丘女子高の一年です！　趣味は、読書とお菓子作り。あ、今度、何か作りましょうか？　マドレーヌとパウンドケーキとどっちが……」
迷う私を前に、彼は冷たく一言。
「それ、何」
「えっ、だから、自己紹介――相手のこと聞く前に、まずは自分のことを言うのが礼儀でしょ？」
もっとよく見えるように、生徒手帳を近づける私から、彼は少し離れて、嫌そうな顔をした。
「誰もそんなこと聞いてないし、あんたのことなんか、知る気もないから」
はっきりそう言う彼の腕を、横で友達がつついている。それでも、彼は気にする様子もなく、私から目をそらして、歩き出す。
その広い背中を、私は必死で追いかけた。
「待って！　せめて、あなたの名前……」
あんまり走るのに慣れてない私は、さっきの全速力で力を使い果たしたみたいで、足がもつれてこけてしまった。
その音に、一瞬だけ振り向いた彼は、何も言わずに、また背を向けた。
助け起こしてくれたのは、彼の友達で、彼の視線で、あわてたように付いていく、その一瞬前――教えてくれた情報に、私は顔を輝かせた。
やっぱり、神様は私の味方だ。

白川学院高等学校――堂々と踊る文字を眺めて、私は呼吸を整えていた。
今日ここに勇んでやってきたのは、もちろん、大事な計画のため。

彼――杉里（すぎさと）　月也（つきや）くんを徹底的に調べよう、計画の。
ものすごい暑さに、頭がちょっとふらふらするけど、それでも構わない。普段の私からしたら、考えられない行動だ。
でも大丈夫、恋は女を強くするんだ！
「ねえ、星奈～帰ろうよ。さすがにこれは、やりすぎだって！」
心配性の美夏ちゃんが、私の腕を引きながら小声で言う。
「だめだよ、まだまだ情報が足りないの！」
月也くん情報を書き連ねたメモと、私はにらめっこする。
夏休み中とはいえ、部活動で登校している生徒たちに何度か訊ねて、得た貴重な情報だけど、まだまだ足りないんだ。
「ようし、またまた突撃、行くぞ～！」
あれ、あれれ？　ところが、踏み出そうとした私の足は、なんだかふらついて、視界がぐらりと回りだす。
「あっ、ちょっと星奈！　きゃ～！　星奈っ！」
背後で響いた美夏ちゃんの悲鳴を最後に、私の意識は途絶えた。

白いベッド、白いカーテン、白い壁……視界を埋め尽くす白一色に、私はぼんやりと瞬きをした。
「星奈、気づいたの？　大丈夫？」
心配そうに私の元へやってきたのは、美夏ちゃん。そしてその隣に腰掛けていた人物に、私は大きく目を見開いていた。
「あっ！　あの時の……」
思わず指差して叫んでしまった私に、その人は苦笑する。
「どうも、俺、藤田　純平。一応、月也の友達やってます」
「星奈が倒れた時、困ってたら、偶然通りかかって、保健室まで運んでくれたんだから。感謝しなさいよ！」
美夏ちゃんの叱り付けるような顔と、爽やかに微笑んだ彼を見比べて、私はにっこり笑った。
そう、だってやっぱり運命は私の味方だったんだ。まさに救世主

と出逢った私は、ついに最強の作戦実行を果たすのだった。

「今日から、短期バイトに入りました！　天野　星奈です！　よろしくお願いします！」
気合いを入れて叫んだ私の自己紹介に、皆さんは笑顔で拍手してくれた。ただ一人を除いて。
「なんで……あんたが、ここにいるわけ？」
早速言われたとおりに、本の積み替えをやっていた私は、後ろからかけられた冷たい声に、満面の笑みで振り返った。
「え、だから、短期バイトに入ったんです」
「それはさっき聞いた。そうじゃなくて、何でわざわざ俺のバイト先に来るのかって聞いてんの！」
苛ついたように聞かれても、私は全然平気だった。
だって、こうしてまた会えたんだもん。
やっぱりかっこいいな～なんて、彼の自然な茶色の髪とか、涼しげな瞳とか、ちょっと冷たい感じの口元だとかを見つめていた私に、月也くんは眉を吊り上げた。
「人の話、聞いてんのかよ！」
「あ、はい。えーと、それはもちろん、月也くんがいるからです！」
元気よく答えた私に一瞬たじろいた月也くんだったけど、すぐに気を取り直したように冷たい顔を取り戻した。
「ふーん……ところで、誰から聞いたの、それ。それになんで、俺の名前まで知ってるんだよ」
「あっ、そうそう、名前だけじゃないですよ。ほら！」
持ち歩いている月也くんメモを取り出して、見せる私。
「杉里　月也くん。白川学院高校の二年三組、成績優秀、スポーツ万能だけど、もったいないことにクラブ活動はしていない。

夏休みは、午前中は駅前の本屋でバイトで、午後からは塾へ通う毎日。あ、それから、現在彼女なし！　ねっ？　完璧でしょ？」
「だから誰がこんなことを教えたんだって聞いてるんだよ！」
「えーと、主に藤田くん情報で、私も現地で調べた結果です。これで、何も知らないくせに、とは言えないでしょ？」
得意げに胸を張った私に返ってきたのは、ものすごく冷たい目だった。
「っていうか、ここまでするか、普通……あんた、立派にストーカー寸前なんだけど」
じとっと見下ろされても、私は全然平気。だって、これって、立派な会話だもん！
「大丈夫、迷惑はかけませんから！」
「十分、迷惑だって――」
にっこりと言い切った私に、月也くんが声を荒げそうになったその時、お客さんがやってきて、その日の会話はそれでおしまいになった。
ようし、今日から張り切って、頑張るぞ！

そして始まった、私の『月也くんと、同じバイトで急接近大作戦！』は、順調に進んでいる。
と、言いたいとこなんだけど、実はあれから二週間。
残念なことに、月也くんと接近する時間すら、あまりなかった。
だって、だって、この本屋、広すぎる！
私の心の悲鳴は、遠くでレジに入っている月也くんにはもちろん届くはずもない。
大きなターミナル駅だけに、わりと流行っている本屋で、だからこその夏休み限定短期バイトが必要なくらい、店員も多い。
まだレジを任せてもらえない私は、ひたすらあちこちの本の整理

だとか、在庫のチェックだとか、そういう作業をやらされていたりして。
「はぁ……お、重い……」
倉庫に積まれていた本の束の中から、指示されていた雑誌を見つけた私は、店内まで、ふらふらで運ぼうとしていた。
いつもは男の子のバイトさんがやってくれている作業だけど、今日は多忙日らしくて、私にも容赦なく回ってきたのだ。
いくら雑誌とはいっても、束になると重くて、もともと力仕事も苦手な私は苦戦していた。
倉庫はクーラーも効いてないし、連日の暑さで、私は結構弱っていたんだ。

「あっ」
思わず手が滑って、後悔するも遅し。
店内まであと一歩というところで、私は雑誌をばらまいてしまった。
あわてて拾う私は、ふと足元が影になって、振り返った。
なんと、そこにいたのは月也くんだった。私の後ろで、散らばった雑誌を黙々と拾ってくれていたのだ。
拾い終わった雑誌を抱えて、私は月也くんを見上げた。
もちろん、お礼を言うために。
でも月也くんは、まるで先回りしたかのように、言い放ったんだ。
「言っとくけど、別にあんたのためにやったんじゃないから。これ以上、失敗繰り返されても迷惑だし」
「あ、ご、ごめんなさい……」
慣れないバイトで、色々とミスをしてしまっていたことを、知られていたんだと、恐縮する私を前に、月也くんは目をそらして、腕組みをした。
「あんたさ、もう、無理してバイトすんのやめたら？」

「ど、どうして――？」
意外な言葉に、驚いた私を見下ろして、月也くんは続けた。
「あんたがどれだけ頑張ろうと、無駄だから――俺、あんたに興味なんか、これっぽっちもないし、これから先、持つこともないと思う。
だから、期待されても困るし、むしろ、迷惑なんだよ」
月也くんの瞳には、目を見開いたままの私が映ってる。でも、映ってるだけで、彼は一切見てもいないように思えた。
だけど――。
立ち去ろうとした、月也くんの背中を、私は追いかけた。
「私、あきらめません！　だって、私、月也くんが好きだから――」
私の言葉に、月也くんは振り返りもせず、そのままレジのほうへと戻っていった。
全てを拒否するような、その背中を見つめながらも、私は不屈の闘志に燃えていたんだ。
だって、私には、とっておきの情報が、まだあるんだから――。

ついにやってきたその日。
バイトを終えて、私はなんとか月也くんのもとへ走った。
「あっ、あの！　待って月也くん！」
裏の社員専用駐輪場で、自転車を出していた彼は、私の剣幕に驚いたように動きを止めた。
いつもの冷たい表情を、私はどうにかして動かしたくて、笑顔を浮かべる。
そして月也くんのほうへ、手にしていた箱を掲げてみせた。
「誕生日おめでとう！　これ、プレゼントのつもりなの。よかったら受け取って――」
言いかける私に眉をひそめて、月也くんは視線をそらした。

「いらないよ」
「で、でも、私――せっかくの誕生日だからと思って……」
必死に追いかける私に、月也くんは苛立ったように目を向けた。
「いいかげんにしてくれよ……別にあんたには関係ないことだろ？」
「関係なくなんかない！　だって、好きな人の誕生日だもん！　お祝いしたいと思うのは、当然のことでしょう？」
思わず叫んだ私を、月也くんは睨んだ。
「大体、俺の誕生日なんて、めでたくもなんともないんだよ……そんなに嬉しそうに、祝ってもらうような日じゃないんだ！」
今までの冷たい顔が嘘のように、苦しみや悩みがたくさんつまったような月也くんの顔。
私は驚きながらも、なんだか――嬉しかった。初めて、見せてくれた、本当の顔だったから。
「例え、月也くんがそう思ったとしても、私はこの日に感謝したい。だって、この世に月也くんが生まれてきた日だから。
私にとって――大好きな人が生まれてくれた、すごく大事な日だから……」
微笑んでそう告げた私を、月也くんは何ともいえない瞳で見つめてた。
その中に揺らいだ一瞬の光は、すぐに隠されて――また意地悪な顔で、私を見たんだ。
「だから……好きだ、好きだって、俺の何を見て言ってるんだよ？
俺はあんたが思うほどいい奴でもないし、優しくなんかない。
会ったばっかりで、話もろくにしたことないし、お互いのこと、知りもしない。そんな状況で、本当に好きになんてなれるわけないだろ！」
吐き捨てるように言った月也くんに、私はなおも笑った。
「出逢ったばっかりじゃいけないの？」
「え……」

戸惑ったような月也くんの瞳をまっすぐ覗き込む。
「会ってから、時間をかけなきゃ好きになっちゃいけないの？　何もわからなくても、好きになることだってあると思う。
だって、恋って、理屈じゃないでしょ？　少なくとも、私はわかった――月也くんが、私の運命の人だって。ううん、感じたの。この人が好きだ！　って。
それに、月也くんは自分が思ってるほど、冷たい人じゃないよ。本当は優しいのに、わざと冷たくしてる。自分が傷つきたくなくて――先に自分から冷たくしてるんだよ。
優しい自分を、心の中に閉じ込めてるだけ」
「な……なんで、お前にそんなこと――」
たじろぐ月也くんの胸の中に届くように、私は想いを込めて微笑んだ。
「だって、私もそうだったんだもん。昔、私苛められてて――あんまり嫌なことがあると、人って気持ちに蓋をしちゃうじゃない？
それで、私は笑うのも、人に期待をするのもやめた時期があったの。でも、そんな私を変えてくれたのは、美夏ちゃんだった。
ちゃんと人を信じることを、もう一度教えてくれたんだ。だから、私はまた笑えるようになった――それで、私思ったの。なんとなく、月也くんも私と一緒なんじゃないかって。
もしそうなら、私はあなたに笑ってほしい。本当の自分を、素直に出してほしい。そう思ったから……」
私が話すのを、身じろぎもせずに聞いていた月也くんに、そっと近寄る。
笑顔でプレゼントの箱を差し出した私を見て、我に返ったように月也くんは叫んだんだ。
「やめろ……お前と一緒にするなよ！」
苦しそうに瞳を閉じて、私を払いのけようとしたその手は、白い箱に当たった。
私の手から、音もなく落ちたその箱は、道路の真ん中に、転がっ

て――無残にもつぶれた中身をあらわにしたのだ。
甘い物が苦手な月也くんが、唯一好きだと聞いた、チーズケーキ。
チョコペンで心を込めて描いた、星と月の模様と、ハッピーバースデーの文字は、かろうじて見える程度にひしゃげていた。

やっぱり、だめだったのかな……。
運命だって、一人だけが思ったんじゃ意味がない。
絶対に振り向いてもらうんだ、そう心に決めてた私も、つぶれたケーキの箱を手に、途方にくれていた。
拾い集めて、ため息と共にゴミ箱へ投げ込んだ私は、込み上げてきた涙を拭うことに気をとられてて、後ろから近づいてきた人影に気づかなかった。
「あ〜あ、ふられちゃったね。天野さん」
「まっ、町田さん！」
脂の浮いた顔で、笑いかけてきたのは、バイトの先輩だった。
「彼目当ての子は多いから、まさかとは思ってたけどさ、やっぱり君もそうだったんだ」
そのにやにやした顔が苦手で、あまり近づきたくないと思ってた町田さんは、なぜか嬉しそうに私の隣に並んだ。
「ああいう奴って困るよなぁ、顔だけはよくてもさ、性格なんか最悪なんだって。ただの見た目で騙されちゃだめだよ」
そう言うと、町田さんはゴミ箱に捨てられたケーキの箱をこれ見よがしに眺める。
「あ〜あ、もったいない……僕だったらこんなひどいことしないのになぁ。大体、君みたいな可愛い子に好きになってもらうような資格、あいつにはないんだよ。
戻ってきもしないじゃないか。あいつが君に何してくれたわけ？

そんなに想う価値、あいつにあるって言うの？」
バイト中の静かな態度が嘘だったかのような、得意げな言い方をする町田さんを、私は思わず睨みつけた。
「やめてください！　月也くんは悪くない……勝手に好きになったのは、私なんだから！」
言い返しても、まだ町田さんはにやにやしたまま私を見てきた。その目が、何か気の毒なものを見てるような、嫌な色に変わっていく。
「健気だね～天野さんは……悪いこと言わないからさ、僕にしときなよ。僕だったら、君を悲しませたりしないから……ね？」
最後は、囁くようにそう言って、私の肩を抱いてくる。その脂ぎった顔に嫌悪感がおさえられなくて、私は彼の手を振り払った。
「やめて！　あなたなんか……あなたなんか、絶対に好きにはならない！」
今度こそ強く叫んだ私の言葉で、町田さんの顔色が変わった。
「何だと……？　下手に出てりゃ、つけあがりやがって――」
大きく振り上げられた手に、私は思わず身を縮ませて、目を閉じた。でも予想した痛みは、訪れなかったのだ。

「いいかげんにしたら、どうですか」
低い声が聞こえて、目を開けた私の前で、町田さんが手首を捕まえられていた。
振り向いた私が見つけたのは――眉を寄せた、月也くんの顔。
「月也くん――！」
戻ってきてくれたんだ。瞳を輝かせた私をちらりと見て、月也くんはそのまま町田さんを睨んだ。
「すっ、杉里……なっ、何だよ！　お前にそんなこと言う資格、あるのかよ！」
町田さんの悔しそうな言葉に、月也くんは冷たく笑った。

「ありませんよ。だけど、あんたに言われる筋合いもないな。自分の嫌らしい顔、一度鏡で見てみたらどうですか？」
口元に笑みをたたえて、それでも睨みつける瞳は真剣そのもので――月也くんに迫力負けした悔しさからか、町田さんは赤くなる。
「なっ、何だと――お前、バイトの先輩にそんなこと言っていいと思って……」
負け惜しみのように言いかける町田さんの手首を、振り払うように離して、月也くんは彼の前に立ちはだかる。
「じゃあ言わせてもらいますけど、先輩の評判、結構悪いの知ってます？　バイトの女の子にセクハラまがいのことしてるって噂、皆知ってますよ。
これで、嫌がる彼女に言い寄ってたことまで知られたら――どうなるか、わかりますよね？」
月也くんがそう言い切るのを、彼の背中越しに聞きながら、私は気づいたんだ。こうやって、町田さんから私を遠ざけて、守ってくれてることを。
やっぱり、月也くんは優しいんだ――！
私が嬉しさに胸を熱くしている間に、今度こそ返す言葉もなくなったのか、町田さんはあわてて逃げていった。

そして二人残されて、私たちの前にはさっきまでと同じ光景。
ごちゃごちゃした裏通りの、人の行きかう普通の道。
でも、さっきまでとは何かが違う。そう、二人の間を流れる空気が――。
「あ、あの……ありがとう、月也くん」
背中にかけた私の言葉に、月也くんはゆっくりと振り向いた。さっきまでの冷たい顔は、なんだか微妙にその色を変えたように見える。

「別に――」
「あんたのために、やったんじゃないから。でしょ？」
ふざけたように後を取った私に、月也くんは一瞬見開いた目を、すぐにそらした。
「でも、やっぱり嬉しかった……月也くんは、私の思ったとおりの人だった！」
嬉しくて、満面の笑みになった私に、月也くんは無言のまま、停めていた自転車を取り出す。
「――乗れよ」
自転車の後ろを指して、無表情に言われて、私はすぐには動けなかった。
「早く乗れって！　家、隣の駅なんだろ？　送ってやるから」
「えっ、本当？　で、でも、どうして知って――」
言いかけた私は、頭に浮かんだ救世主の面影で、口をつぐんだ。
そうか、もしかして、月也くんにも私の情報が伝わってた――？
「あ、ありがとう――！」
急いで乗った私に、月也くんはゆっくりと自転車を走らせる。
「またあんな奴に捕まったら困るから……それだけだからな」
ぶっきらぼうに呟いた、彼の耳が気のせいか少し赤く見えて――私は微笑んだ。
「月也くん――私、やっぱりあなたが大好き！」
私の感極まった叫びに、月也くんは思わず自転車をよろけさせて、あわてたように立て直した。
「よ、よく、そんなこと飽きもせずに何度も言えるな……」
今度こそ、完全に照れ隠しのようにぼやく月也くんの背中に、私はしっかり抱きついた。
「だって、本当だもん――！」
「……勝手にすれば」
負けずに言った私の耳には、そう呟いた、月也くんの小さな声が、確かに届いたんだ――。

始まったばかりの私の恋に、やっと訪れた奇跡。
小さな、小さな芽吹きを逃さないように、私は広い背中を、しっかり捕まえた。

（後書き）

べたな「出逢い」がテーマということで、なんと他候補三作も上げて書き比べてみる、という作業を経て、ようやく完成したのがこの作品です。

というのも、自分が天然な「べた」好きであるのはなんとなく自覚していたものの、あえて「べた恋」を書こうと考えると、すごく難しく思えて、なかなか書き上げられませんでした。

これが、「べた恋」参加作品としてふさわしいのか、それに作品の出来自体も不安ですが、自分なりに思いを込めて書きました。

未熟な点など、何でもコメントくださると嬉しいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1835e/

星と月の奇跡

2010年10月8日13時38分発行